

【実践報告】

教育実習（教育実習Ⅰ 幼稚園）の報告

広島文教大学教育学部

教育学科 准教授 上村加奈

1 はじめに

本学では教育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを段階的に学修する。教育実習Ⅰは2年後期履修科目である。教育実習Ⅶ（観察・参加実習）が2年前期の選択科目として開講されていることは本学の特徴的な取り組みといえる。選択科目であるが、ほとんどの学生が履修するため4段階の学びとなっている。教育実習Ⅰは学内での学修を基本とし、幼児教育の基本にもとづく実践力を養成することを目的とし、続く教育実習Ⅱ（幼稚園での2週間の実習）を見据えている。そこで、授業のねらいを教育実習Ⅱに臨む前に、教育実践力を培うとしている。

培う力として、①保育の基礎理解・子ども理解②保育指導案を立案する力③教材研究をする力④保育を展開する力（子どもの様子を観察し、実態把握をする力・子どもの実態に応じて働きかける力・集団と個人に対応する力）⑤基礎技能の5点としている。

2 実施のスケジュール

授業の到達目標から15回の授業を、指導案の書き方と内容検討、模擬保育、学びの振りかえりで構成している。

項目	授業回	主な内容
全体指導 指導案の書き方	第1回	オリエンテーション（教育実習Ⅰの位置づけ 授業のねらいと概要・実習資格）
	第2回	指導案立案の要点 模擬保育Ⅰ指導案の内容（5・6月の指導計画から考える）指導案検討
	第3回	指導案の書き方と内容検討（プレゼンテーションによる話題提供 意見交流）指導案検討
グループ別模擬保育	第4～8回	模擬保育Ⅰ（対象年齢 3・4・5歳児） 指導案検討（5回）
全体指導 中間まとめ	第9回	模擬保育Ⅰのまとめ 模擬保育Ⅱに向けて（年間指導計画から考える）指導案検討 教育実習Ⅱに向けて
グループ別模擬保育	第10～14回	模擬保育Ⅱ（対象年齢 3・4・5歳児） 指導案検討（3回）
全体指導 学修のまとめ	第15回	教育実習Ⅰのまとめ 教育実習Ⅱに向けて
保育実践		幼稚園における部分保育の実践

3 活動の概要

授業内容により全体指導とグループ別指導にし、担当教員6名が専門性を発揮して学生が多様な学びができるようにしている。本年度から履修学生が10名増加したため、担当教員を6名配置し模擬保育の充実を図っている。

模擬保育は履修学生を6グループに分けて行う。模擬保育は全員が2回の保育者役を経験できるようにしている。

1) 授業の概要

①指導案の立案と書き方の学修

昨年までと同様に、2年前期までの授業で得た知識を基に、指導案の立案と書き方の要点を学修する。指導案の役割や書き方は幼児教育課程論や保育課程論の授業の学びと関連させて、段階的に学修できるようにした。具体的に理解することを目的に、第3講で学生の代表者が、立案した指導案をプレゼンテーションし質疑応答や意見交流する場を設定した。書き方や保育の流れ(導入・展開・まとめ)の理解を促すことに留まらず、遊びを通して行う保育の本質的な部分を理解するように働きかけた。本科目を履修することにより、子どもにとっての遊びの意味を考えながら指導案の内容を検討することを意識づけた。6名の教員が活動のテーマを示し、遊びの特性に応じた指導法を教示した。今年度は、①自然をテーマにした活動②集団性を高める活動③身体を使う活動④ピアノを取り入れた活動⑤児童文化財を取り入れた活動⑥制作活動とした。

②模擬保育Ⅰ

教育実習Ⅱの実施時期である5・6月の指導計画を基に指導案を立案した学生が保育者役に、他の学生が子ども役となって模擬保育を行う。模擬保育の後に協議会をもち、実践の振り返りを行った。保育者役と子ども役両者の視点で意見交流した。

自己評価票に、身につけることが望まれる力を基本的スキルと応用的スキルで示した。基本的スキルを①構成員②応答性③表現技術に分け、各項目3～4の視点を示して目指す力を明示した。保育者役を担った学生は自己評価票をもとに項目ごとに自己評価する。

模擬保育Ⅰが終了した時点で、教育実習Ⅱに向けての意識づけと模擬保育Ⅰのまとめを行った。本授業が教育実習Ⅱに繋がっていることを意識できるように、教育実習Ⅱの概要と今後の取り組みを提示した。教育実習Ⅱを見据えて、模擬保育Ⅰでの学びの確認と疑問点の洗い出し、模擬保育Ⅱに向けた取り組みを考えた。

③幼稚園での保育実践

模擬保育で子ども役になる力を培うこと、遊びの指導を体験的に学ぶことを目的に導入して3年になる。附属幼稚園において13時から1時間半の時間帯で、お帰りの会での保育実践を行う。実践内容は、手遊びや弾き歌い・絵本の読み聞かせなどとし学生が選択することとした。曲や絵本を選ぶことも学修となるため、季節や年齢に配慮して各自が考えることとした。子ども理解・指導案の構想力と実践力向上をねらって、模擬保育Ⅰ終了までに1人1回の実践ができるように計画した。

④模擬保育Ⅱ

模擬保育Ⅱでは、模擬保育Ⅰの学びを踏まえ年間指導計画を基に、保育者役の学生が実践する月を決めて指導案立案と模擬保育に取り組む。授業後には、学びを振り返って改訂指導案を作成する。

2) 模擬保育の自己評価と到達度

履修学生の模擬保育自己評価(5段階で評価)の一覧が次の表である。

項目	構想力①	構想力②	構想力③	応答性①	応答性②	応答性③	応答性④	表・技①	表・技②	表・技③
評価の観点	子どもの実態とねらいの関連性	子どもの実態を踏まえた教材(活動内容)	ねらいと活動内容の関連	応答的なかわりによる報告の展開	集団の様子に応じた活動展開	困難を訴える子どもへの応答的な対応	興味を示さない子どもに対する理由に応じた対応	場に応じた声の大きさ	表情の柔らかさ	子どもが理解できる説明
模擬保育Ⅰ平均値	3.48	3.65	3.15	2.93	2.78	2.78	2.72	3.75	3.35	2.67
模擬保育Ⅱ平均値	3.86	3.84	3.66	3.36	3.38	3.38	3.21	3.77	3.49	3.30
模擬保育ⅠとⅡの差	0.38	0.19	0.51	0.43	0.60	0.60	0.49	0.02	0.14	0.63

10項目全てにおいて、平均値が上昇している。「場に応じた声の大きさ」「表情の柔らかさ」は比較的变化が少ない項目である。毎年、全体に聞こえるような声を出すことに苦心している学生がいるが、今年度は声の大きさに関して担当教員からの指摘もなく、発声に関して困難を感じる学生が少なかった。評価の値が高いことから、自己の状況を正しく認識できている。

「ねらいと活動内容との関連」が0.51上昇している。模擬保育Ⅰ終了後となる第9講に中間まとめを行った。改善内容を書き込んだ指導案と学修記録を資料に、学んだ内容を整理して模擬保育Ⅱで理解したいことを確認した。学生の発言から、幼児教育課程論・保育課程論で保育指導案について学び本科目で立案と実践に取り組んだことで、子どもの実態に応じてねらいを設定すること、ねらいをどのように活動内容に反映するのが具体的に理解したことを確認できた。

模擬保育ⅠとⅡの値の差が0.6以上あったのは、「集団の様子に応じた活動展開」「困難を訴える子どもへの応答的な対応」「子どもが理解できる説明」の3項目であった。学生が課題意識をもって取り組んだことにより、この3項目が上昇したことが次の学修記録の記載内容から読み取れる。

- ・粘土が楽しすぎてみんなが子ども役を演じやすかった。
- ・子ども役をすることで、どのような声かけをするとやる気が起きるか考えることができた。
- ・子どもによって表現の仕方も違ってくるので、保育者は否定せずその子どもなりの表現・イメージを読み取る。
- ・活動する前はどうしても説明が多くなってしまいうので、パネルシアターなどを使って質問形式にすると子どもたちも飽きにくい。
- ・小声で話しかけるとワクワクすることに気づきました。実習生だけの話にならないように応答的な言葉かけが必要であると思います。
- ・保育者が動作を大きくし園児の表現を受け入れたり見本を示したりすることでさらに理解が深まる。

子ども役の実験から、集団の実態に応じて楽しいと思える活動の提供や援助をすることを実感している。個別理解に目を向けることができ、子どものありのままの姿を受け入れる姿勢に目を向けている。応答的なかわりの重要性や説明の方法や技術についてどのように学んでいるかがわかる。

4 成果と課題

1) 実践の振りかえり

初講において、本授業がPDCAサイクルにより立案の力と実践力を培うと明示している。2年生の段階は、指導法や保育技術を学修し始めたところである。現時点の実践力を理解し、達成できていることと改善点を把握する力が今後の成長につながる。近年、自信をもちにくい学生がおり、保育者として求められる知識や技術・表現を表出しにくい現状が見える。2年生の段階で自己の成長を認識できていることは、続く実習での学びや就職活動への意欲の面でも期待できる。

今回、自己評価点を分析することで学生の評価する力を確認することができた。評価する力を培う

ことを支えているのが協議会である。意見交流がされ各回の協議会で焦点化した学びとなっている。6名の教員が実践内容にそって検討事項を示唆しているが、学生の主体的な姿勢によって学びが深化している。

また、第1回目の実践から比較的到達度が高い項目と、段階的な取り組みにより伸びている項目と伸びにくい項目などを把握して教授方法を検討したい。

2) 実習に向けた心がまえ

本学では教職課程履修の手引きに、実習の履修資格として「①学力・人物ともに優秀な学生とします。すなわち、学業成績が優れているだけでなく、授業態度・生活態度も極めて真面目で、将来教職に就く意志がある者とします。」と記している。授業態度や生活態度を正すことを求めている。学生の実態に目を向けると、締め切りを守ることが苦手な学生が散見される。実習においては特に注意して指導する必要がある。本科目では時間指定の締め切り厳守と、締め切りを守れない場合は遅延届けを課している。厳しくすることのみが有効であるとはいえないが、就職した時との段差を少なくするために、まずは大学の授業でルールを明確にして守る意識をもつことに取り組んでいる。遅れる学生は、自身の弱みを知り遅れないようにするための対策をたてるように指導している。学生の中で意識化され規範意識が向上している。継続することで内面化していくように考えている。

3) 科目間連携

高等教育センターが実施した授業評価に基づき、今年度の授業を公開することとなった。この機に、各教員が担当している他の授業との関連性について整理して、連続性のある学びになるように指導することが再確認できた。近年、科目間連携の取り組みを推進するよう示されている。他の教員との連携が求められているのであるが、まずは個々の教員が自身の科目の関連を意識することである。指導法である本科目の位置づけを認識して前後の科目の教授内容の点検と改善に努めたい。今年度から取り組んでいるティーチングポートフォリオ作成の足がかりとし、授業の質向上に取り組みたい。